

城下町静岡における歴史性の再認識と「らしさ」を活かした都市空間の再設計

宮下 貴裕*

*慶應義塾大学総合政策学部

はじめに

城下町都市静岡は駿府城の天守閣が失われ歴史的建造物も多くは現存していない状況であるが、都市における歴史性にはこのような「形」としての要素だけでなく、時代の流れの中で更新されてきた都市構造という「システム」も内在する。そこで近代以降の都市計画史において、時代ごとに「それ以前の都市構造」がどのように認識され、どのような理念で継承されたのかを体系的に明らかにすることで都市の本質を捉え静岡の「らしさ」を見出す。

1. 近代以降の都市構造に対する認識

静岡においては江戸時代からの都市構造を強化する形で近代化が図られてきた。近代以降の都市計画における転機としては1927年から始まった都市計画街路事業、1940年に発生した静岡大火の復興計画である「静岡市復興計画」、そして戦後の1950年代後半から活発化した都市不燃化運動があげられるが、これら3つの動きにおける行政の資料から当時の都市構造や歴史性がどのように認識され実際にどのような改造が行われたのかを明らかにした。

3つの時代に共通しているのが「通りの意識」の強さである。特に呉服町通りは江戸時代から商業の中心として栄えてきた通りであるが、都市計画街路決定の際に江戸時代からの街路の多くが拡張される中、都市計画静岡地方委員会(1927)では呉服町通りについては「幹線道路化を考えたが、小売商店が多く拡張するのは難しい」「呉服町通りにも利益にならず系統上もよろしくない」と述べられている。1940年に起きた静岡大火は中心市街地全体を焼き尽くし、市内の全戸数のうち約13%が焼失した。その復興計画である「静岡市復興計画」では街路の新設は行われず江戸時代の街路を拡張する手法が採られた。呉服町通りにおいては壁面を2m後退させ共同建築化を行うという計画であったが、小板橋(1940)は「木造建築の共同性における脆弱さのほかに、各商店が江戸時代からの歴史を持っていることから共同化への抵抗が強い」と述べ、結果的に共同建築化は実現しなかった。

その一方で戦後の都市不燃化運動においては呉服町通りは率先して共同建築化に取り組み、1959年に総延長866mの防火建築帯が完成した。この整備において日本都市センター(1960)は「繁華街を带状に街路に沿って防火建築を並べるだけでは目的達成には至らない」としたが、結果的に整備は通り単位に留まり街区単位では行われなかったため賑わいの面的な広がりにはつながらなかった。呉服町通りの商店街は現在も商業の中心であり続けているが、賑わいが面的に拡大しないという課題も引き継がれている。「通りの意識」は課題も多いが継承すべき城下町基盤であると考え、「形」としての歴史的要素を持たない多くの城下町都市においてはこのような要素を含めて歴史性であるという認識を持つことで都市の本質をつかむことにつながると考える。

おわりに

静岡の中心市街地は江戸時代からの場所性が継承されたが、これには「通りの意識」が強く江戸時代からの歴史を持っている通りが非常に保守的であったことが大きく影響していると考えられる。このように静岡の都市計画においては大胆な都市改造は行われず江戸時代からの都市構造を強化する形で近代化が図られてきたが、これは結果論ではなく当時の資料から行政側が場所性の継承を意識していたことが明らかになった。

謝辞

ヒアリングに協力してくださった元静岡市長天野進吾氏、現静岡市長田辺信宏氏、静岡市都市計画課今川俊一氏に心から感謝いたします。

引用文献

- 都市計画静岡地方委員会(1927) 都市計画静岡地方委員会議事速記録第五回. 56pp
- 小板橋務雄(1942) 静岡市復興事業における壁面後退線の指定に就いて. 区画整理, 8(5), 40~42.
- 日本都市センター(1960) 都市の再開発. 日本都市センター, 155pp.